取材メモ「社会問題をテーマに児童書の普及を担ってきた当社からSDGsはじめのいっぽを出す意義は大きい」と門脇さん。

児童書の世界には「図書展示会」や「巡回販売」などを利用した独特の販売方法があります。主な対象は日本全国の学校図書館のため、出版社単独でやるには規模が大きすぎるので出版社間でグループをつくり、全国を回るシステムが構築され、長く運用されてきました。それがコロナ禍で中止になったこともあり、オンラインで商品説明会や展示会が開かれるようになりました。

8月には、学校の先生や司書の方を対象にSDGsはじめのいっぽのオンラインイベントを開催しました。私自身、社外のSDGsイベントに呼ばれて登壇することもあります。SDGsは現在、間違いなく多くの人たちが関心を持ってくださるキーワードではあるのですが、世の中では、SDGsは環境問題の延長の言葉、というような扱いを受けることがほとんどで、イベントではその辺りの説明から行う必要があります。

原さんはSDGsは積極的にワンテーマを掲げて広めるものではない」と常にお話しになっていますが、私も担当編集者として原さんと想いを共有していることもあり、今回17の目標の関連書が揃うカタログやポスターを作製しました。

――そういった意味では、汐文社さんが戦争や平和の問題に関心を持ってほしいという思いはひと際強いでしょうね。

私たちは『はだしのゲン』の出版社であることに誇りを持っています。環境問題をきっかけにSDGsに入ってきてもらうことは大歓迎ですが、平和や戦争に関する問題にまで関心を広げていってほしいという想いはあります。戦争関係で言うと、ヒロシマ関係の本を何冊か私も作りました。読み物の『ヒロシマをのこす　平和記念資料館をつくった人』長岡省吾』もその一つです。

当社では「イスラム国」人質事件に巻き込まれた後藤健二さんの本（『ジャーナリスト後藤健二　ノンフィクションシリーズ』全4巻）を出していて、私自身、事件があったときに後藤さんの担当編集でした。戦争のことに関してあらためてしっかり向き合おうと思ったのは後藤さんとのことが大きいかもしれません。

そういった本を多く発刊する身にとって厳しい現実なのは、そういう子どもたちにとって酷苦しい児童書はそんなにパッと売れるものではないということです。私は比較的、世の中に求められているものに関しては自由に作らせてもらっていますが、編集者の独りよがりになっている企画にはゴーサインが出ません。その辺は結構シビアです。

――最近、SDGsに関する企業の動きや発信などで思うことはありますか？

社会貢献活動に携わるうえでSDGsを旗印にするのは簡単ですし、企業にとって取り組みやすいテーマではあると思います。これが「SDGsウォッシュ」という「やってるふりをして結局何もやっていない」という批判につながっています。けれども、SDGsを合言葉にみんなが同じ方向を向くということ自体はとてもいいことだと思います。せっかく世の中でSDGsに関心をもってもらえたので、企業にも積極的に絡んでもらいながら、マネタイズするにはどうしたらいいのか、もっと考える必要があるのではないかと思います。

企業も絵本を講座で活用を

――企業もSDGs講座のようなところで、難しい話から始めるよりも絵本を活用した方が入りやすいと思いますが。

そうなんです。SDGsに限らず一般では分かりずらいものは絵本を入り口にして聞くと大人も入りやすい。そのため、例えばの話ですが、企業が自分たちの考えるSDGsの形を絵本で表現する方法が考え得ると思います。

先ほど企画が本になるのはかなりシビアだと言いました。どうしたら子どもが飽きずに読んでもらえるのか。少なくとも子どもが読みやすいように配慮した本づくりの発想は一般の方には難しい。いや、そこまでできる一般の方もまれにいるかもしれません。けれども、実際に読み手のすそ野をどうやれば広げることができるのか、それを考えられるのは、この業界にいないと分からないと思うんです。一般の方が出版社を介さず本を作ると、「作りました、お客さんに配ります」。それで終わってしまうことがほとんどではないでしょうか。

けれども、出版社が入り流通に乗せることまで考えた本づくりができれば、しっかりと世の中に広まっていく可能性があります。どういう形だったら読者に受け入れられ、かつ販路まで考えて本を作ることができるのかは出版社の人間でないと難しいものです。もし本を作るなら一度、出版社に声を掛けることをお勧めします。

――企業が絵本を作るなら最終的には、子どもが読んでもらうというところまで考えないといけないということですね。

子どもが手に取る前にもう一つ関門があるんです。車や魚の絵本なら子ども自ら手に取るかもしれませんが、特にSDGsの絵本は子どもがすぐに欲しいと思う内容ではないので、子どもがいいなと思うことはもちろん、大人に対しても「いい絵本でしょう」と説得しないといけないのです。この大人と子どもに対してダブルスタンダードを常に取り続けるというのが結構、大事なことではないかなと思います。学校の先生や保護者にどうアプローチするかという視点で本を作り、それをしっかり流通に乗せることが大事なのです。そのためには、市場のことが分かっていないといけませんし、かつクオリティも高めていく必要があります。

――今後の意気込みと、現在、手がけているSDGs関連の本などはありますか？

6月に大人と子どもが一緒に「選挙とはなにか」を考えるための一冊として『きょうは選挙の日。』という本を出しました。私がこのところあらためて意識していることは、SDGsの16番目の「平和と公正をすべての人に」です。平和や戦争をストレートに伝えるだけではなくて、戦争を起こさないためには、世の中の制度設計や法律をしっかり守らないといけないということも同じくらい大事だと思うんです。『学校で知っておきたい　著作権』という本を作ったのもその線上にあります。

今つくっているものでいうと、秋に発行されますが、ジェンダー関係の本があります。ジェンダー問題を絵本にしてできるだけ低年齢の子どもたちに考えてもらいたいと考えています。

SDGsに関してはここから先2030年までずっと一辺倒でいくと思っていません。最初は知るところから始まり、次は各テーマを深堀りしてどこがゴールなのか考えていきますよね。そして、ここから先はもうSDGsという言葉から離れて、環境や人権といった個別のテーマに戻っていく。それは私たちがSDGs以前から子どもたちに本を提供してきた内容ですが、それぞれの社会問題を追求していたことに戻っていくと思うんですよ。ここから先は、枝葉に分かれた部分を各々が掘り進めていく、そういう時がくるはずなんです。

けれども、SDGs以前と以後で確実に違うのは、環境、人権、平和と枝分かれしていくとはいえ、振り返るとすべてSDGsという幹があるわけです。後ろをみれば全部がSDGsにつながっている。それこそが「持続可能」のイメージだと私は思います。私の仕事で言うと、ワンテーマで本を作っていても最終的にSDGsで束ねられるということをイメージしていきたい。戦争の悲劇を訴える本だけを作ればいいのではなく、環境面からみたらどうだろうかという意識も必要だということですね。視野を広く持ちながら本を作っていかないといけないのだろうな、社会からもそう評価されていくのだろうなと感じています。

❶❷門脇さんが企画したSDGsのアクションを促すポスターと選書カタログ❸❹『わたしがかわるみらいもかわる　SDGsはじめのいっぽ』